



Data

監督・脚本: ギャヴィン・フッド

出演: キーラ・ナイトレイ / マット・スミス / マシュー・ゲード / レイフ・ファインズ / リス・エヴァンス / アダム・バクリ / コンリース・ヒル / ジェレミー・ノーサム / インディラ・ヴァルマ / ジョン・ヘファナン / マイアンナ・バリング / ハティ・モラハン

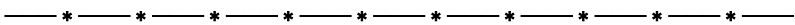
👁️👁️ みどころ

黒沢清監督の『スパイの妻』(20年)が、第77回ベネチア国際映画祭で最優秀監督賞(銀獅子賞)を受賞!北野武監督の『座頭市』(03年)以来17年ぶりの快挙だが、なぜ彼女は“スパイの妻”になったの?

同作は面白い“ドラマ”だが、「Based on Actual Events (事実に基づく物語)」と表示される本作は、キャサリン・ガン事件がテーマ。2001年9月11日に発生した同時多発テロ後のイラク開戦は、“フセイン大統領が大量破壊兵器を保有しているため”だったが、その真偽は?

今の私たちは、そこに情報操作や情報隠ぺいがあったことを歴史上の事実として知っているが、英国の情報機関GCHQに勤務していたキャサリン嬢の場合は?職務上知り得た極秘メールの取扱いは?彼女の行動の是非は?新聞社の取材と決断は?

映画は勉強。本作はその典型だが、本作の結末をどう考えるかは、何ともはや・・・?



■□■あなたはキャサリン・ガン事件を知ってる?■□■

アメリカのニクソン政権下で発生した、1971年の「ペンタゴン・ペーパーズ事件」と1972年の「ウォーターゲート事件」は有名で、日本のマスコミでも大々的に報じられたから、私もそれはよく知っている。映画でも『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』(17年)、『シネマ41』37頁)、『ザ・シークレットマン』(17年)、『シネマ41』44頁)、『大統領の陰謀』(76年)等で取り上げられ、大きな問題提起をしていた。

他方、全世界に衝撃を与えた2001年の9.11同時多発テロの犯人捜しを続けたジョージ・W・ブッシュ大統領は、その犯人をイラクのフセイン大統領だと決めつけたうえ、

その報復に躍起になっていた。大量破壊兵器を開発し、保有し続けているフセインを放置することはできない。フセインは国連の査察団による調査を直ちに受け入れる。それがブッシュ大統領の主張であり、それにピッタリ同調したのが、同盟国イギリスのトニー・ブレア首相だった。幸か不幸か、憲法9条を持ち、専守防衛しかできない日本は、日米安保条約下にあっても自衛隊の海外派遣ができないことは明らかだったから、仮に国連決議でイラク開戦可と可決されても、国連軍（多国籍軍）への参加は不可能だった。しかし、連日そんな報道をTVで観ている、本作のヒロインたるキャサリン（キーラ・ナイトレイ）の場合は・・・？

本作のテーマはそんなキャサリンを主人公にした「キャサリン・ガン事件」だが、あなたはそれを知ってる？キャサリン役を演じたキーラ・ナイトレイは事件当時17歳だったから、それを知らなかったのは仕方がないが、当時あれほど新聞記事に目を通していたつもの私も、寡聞にしてそれは全く知らなかった。「キャサリン・ガン事件」って一体ナニ？

■□■この職場は特殊！職員の権利と義務は？その自覚は？■□■

本作導入部では、昼休みを終えたキャサリンが同僚とおしゃべりしながらデスクに戻ってくるシーンが登場するが、そこでは彼女が中国語で喋っている会話をはっきりと聴き取ることができた。これは、去る7月12日に実施されたHSK（汉语水平考試）の3級検定に合格した私の「汉语学習」の効果だが、キャサリンはなぜ中国語を喋っているの？

それは、彼女が今GCHQ（英政府通信本部）で中国語の翻訳を担当しているからだ。後に、「ある事情」によって明らかにされる情報によると、彼女は3歳の時に台湾に渡り、大学進学のため英国に戻り、その後日本で英語教師をしていた時に、たまたま見た新聞広告でGCHQに応募し、翻訳分析官としての勤務を開始したそうだから、中国語の翻訳はお手のものらしい。しかし、語学力を生かした観光ガイドや通訳ではなく、GCHQで働くというのは、かなりかなり特殊な意味があるのでは？GCHQでは勤務時間は短いうえ、給料は良いそうだが、それは一体なぜ？また、これも後に明らかにされるが、GCHQで働くについては、さまざまな誓約書にサインさせられるらしい。そんな特殊な職場で重要な翻訳業務に就く職員の権利と義務は？さらに、守秘義務を含めて、ある意味スパイ組織とも言えるGCHQで働くことの自覚は？

本作冒頭、キャサリンと一緒に住んでいるヤシャル（アダム・バクリ）に対して、食事中も盛んに、TVで「イラクとの戦争は不可避である」と語るブレア首相の姿に文句をつけるシーンが登場する。しかし、そんな思想、信条の持ち主であるキャサリンにGCHQでの仕事が務まるの？また、後に、ヤシャルは単なる同棲相手ではなく、結婚している男だということがわかるが、実はイスラム教徒のクルド系トルコ人。私はそんなキャサリンの私生活をとやかく言うつもりはないが、ひょっとして、それも後日、彼女の人生に大きな（悪）影響を与えるのでは？

■□■極秘メールをコピー！持ち出し！それが許されるの？■□■

GCHQは諜報機関だから、そこで翻訳分析官として働いていれば、日々さまざまな極秘情報に接するのは当然だ。そんな職場で、職員としてなすべきことは、ひたすら機械的に任務を遂行すること。つまり、その内容にいちいち反応することは無意味であるばかりでなく、有害。仮にその内容に納得できないことがあっても、それはぐっとハラの中に収め、口外することは厳禁。そんなことをすれば、公務秘密法違反になることは明らかだ。いくら若いキャサリンといえど、そのくらいのことは十分叩き込まれているはずだ。私は弁護士としてそんな前提に立っているから、NSA（米国家安全保障局）から「イラク侵攻を認めさせるために、国連安全保障理事会のメンバーへの盗聴を要請する」と書かれたメールを読んだキャサリンがその後にとった行動は是認できない。

本作は、冒頭から、ニュース番組で「イラク戦争は不可避である」と語るブレア首相に対するキャサリンの批判的姿勢が明白だから、NSAからの前記メールにキャサリンが憤りを覚えたのは十分理解できる。しかし、イラク戦争へのイギリスの参加についてどんな意見を持つのかは個人の自由だが、本作に見るその後のキャサリンの行動は明らかに一線を越えたもので、ハッキリ言って公務秘密法違反の犯罪行為になることは明らかだ。「ウォーターゲート事件」では、盗聴器を仕掛けるためウォーターゲートビルにあった民主党本部に入り込み、「ペンタゴン・ペーパーズ事件」では、こっそり盗み出しコピーしたペンタゴン・ペーパーズを新聞社に横流していたが、さて、「キャサリン・ガン事件」におけるキャサリンの行動は？GCHQの職員として採用されるまでにどれくらいチェックされるのか、また、日々の職場内でのチェックがどの程度効いているのかはわからないが、本作を観ていると、こんな風にコピーし、こんな風に持ち出すことが楽々とできることにビックリ！諜報機関であるGCHQの職場がこんなものでいいの？

■□■なぜオブザーバー紙のトップ記事に？関係者たちは？■□■

「ペンタゴン・ペーパーズ事件」では、ニューヨーク・タイムズ紙がペンタゴン・ペーパーズをすっぱ抜いた。そして、その記事は1971年6月13日の朝刊のトップを飾った。それに対して、キャサリンがコピーして、友人のジャスミン（マイアンナ・バーリング）に投函し、反戦活動家イボンヌ・リドリー（ハティ・モラハン）を通じてオブザーバー紙の記者マーティン・ブライト（マット・スミス）の手に渡っていたNSAからの極秘メールのコピーは、2003年3月2日のオブザーバー紙の朝刊に掲載された。その見出しはショッキングなものだったから、ブレア首相はじめ、英国政府が驚愕したのは当然だ。

他方、その記事を読んだキャサリンは、ショッキングな見出し以上に、盗み出したメールの全文がそのまま掲載されていることにビックリ！実は、キャサリンは、メールをジャスミンに送付した後、自分がしかした事の重大さに気付き、再度ジャスミンの元を訪れて、「あれはもういいわ」と取り消しを懇願していたほどだから、このトップ記事にさらに驚いたわけだ。そんなキャサリンに対して、ジャスミンは「もう自分の手を離れてしまっ

た」と語り、事態の重要性を説いていたが、このシークエンスを見ていると、いかにもキャサリンの軽さ（軽薄さ？）が目についてくる。

それはともかく、「Based on Actual Events（事実に基づく物語）」と冒頭に表示された本作は、時系列に沿って、シリアスかつスリリングなストーリーを展開させていく。そこに登場する人物は、イボンスから、地下の駐車場でメールのコピーを受け取ったオブザーバー紙の記者マーティン・ブライトをはじめとする個性的な面々だ。朝日新聞VS産経新聞のバトル(?)を見ていると、新聞社ごとに政治的な主張や立場がはっきりしていることがよくわかるが、それと同じように、当時のイギリスではイラク開戦を支持する新聞と、それに反対する新聞の区別は明確だった。マーティンが勤務するオブザーバー紙はイラク開戦支持派だったが、オブザーバー紙米国駐在記者のエド・ブリアミー（リス・エヴァンス）は、断固とした開戦反対派。したがって、メールの真偽の確認をはじめとして、マーティンたちの取材をまとめ、「国連決議はインチキ、イラク開戦反対」の記事を載せるかどうかの決断は難しい。最終的にそれに「GOサイン」を出したのは、編集長のロジャー・アルトン（コンリース・ヒル）だが、本作に見るこれらの関係者たちの極秘メールを巡る取材での奮闘ぶりは興味深い。

その展開の中でも最高にスリリングなのは、メールの送り主であるNSAの職員フランク・コーザが実在する人物かどうか、をめぐる取材だ。警察の捜査と違い、新聞記者の取材には強制力はないから、どこまで真実に辿り着けるかは記者たちの執念による部分が多い。そんな視点から、本作ではキャサリンのみならず、いやキャサリン以上に、報道関係者たちの動きと執念に注目したい。

■□■犯人捜しは？イラク侵攻開始は？■□■

否が応でも職員のうち誰かによって極秘メールがリークされたことを認めざるを得ないGCHQが、厳しい犯人探しに乗り出したのは当然。こんな事態を許しては、007ことジェームズ・ボンドのような優秀なスパイで名を鳴らしたイギリス諜報機関の名が廃れてしまうというものだ。まずは、すべての職員1人1人に簡単な事情聴取がされる中、キャサリンはハッキリ「自分ではない!」と答えるが、内心ではドキドキ、ビクビク……。

キャサリンと一緒にあのメールに不満を語っていた同僚も厳しい尋問を受けたから、キャサリンの良心の呵責は……？さらに、今日は某人物がウソ発見器にかけられるらしい。それは順次拡大されるから、近いうちにこの私も……。もしそうなったら、私のウソはすぐにバレてしまうのでは……？そう考えたキャサリンの自白は意外に早かったから、これにも私はビックリ。おいおい、そんなに早くゲロするのなら、最初からそんな大それたことをするなよ。そう思ってしまったが……。

他方、キャサリンが盗み出した極秘メールがオブザーバー紙の一面を飾ったのは、2003年3月2日。こんなものがすっぱ抜かれたら、ブレア首相率いる英国政府はイラク開戦を断念せざるを得ないことに……？少しはそう思ったが、何の何の。事態は逆で、そ

の2週間後の3月17日には、TVニュースが「国連決議なしで開戦も！」の報道を流し始め、3月20日には、ついに私たち日本人もTVニュース上でよく見たイラク開戦が始まった。これでは、オブザーバー紙の努力はもとより、キャサリンをはじめとする関係者の努力はすべて無意味だったの・・・？

■□■公訴提起は？弁護士は？無罪を主張？情状酌量で？■□■

日本では、「犯罪の容疑あり」として逮捕されると、起訴まで最大20日間の拘留が認められている。そして、起訴された後は、保釈の権利はあるものの、重大事件では保釈は容易に認められず、長期間拘留されながら裁判を受けるケースが多い。しかし、今年の6月30日に制定、施行された香港の「香港国家安全維持法」では、「香港の女神」こと周庭は、逮捕された翌日すぐに保釈されていたから、アレレ・・・。本作でも、GCHQの内部調査の段階で自らのリークを告白したキャサリンは直ちに警察に連行されたが、ちょっとした尋問(?)の後、すぐに保釈されたから、アレレ・・・。イギリスの裁判制度は一体どうなっているの？

そんな疑問が広がる中、本作後半からは、人権組織リバティに所属する3人の人権派弁護士①ベン・エマーソン(レイフ・ファインズ)、②シャミ・チャクラバティ(インディラ・ヴァルマ)、③ジェームズ・ウェルチ(ジョン・ヘファーナン)が登場する。その中でもベテランのベンは、知識、意欲のみならず、昔培った人脈においても素晴らしい能力を発揮するので、それに注目！

まず最初のポイントは、公訴局から告発されるか否かだが、残念ながら告発されることになりそうだ。そんな情報を得た弁護士たちは、キャサリン夫婦と打ち合わせをする中で、無罪の主張をするのか、それとも情状酌量を求めるのかで迷っていた。そこでは、情状酌量の意見が強かったが、メールのリークは“不法な戦争を止め、人命を救う”というやむを得ない事情のためだと主張する方向性が提示されると、俄然無罪の主張に傾いていくことに。私の目には、それはかなりの無理筋だが、その主張のためには何が必要なの？そこで役立ったのが、ベンの貴重な人脈の1つである、かつて外務省副法律顧問をしていた旧友のエリザベス・ウィルムズハースト(タムシン・グレイグ)。彼女と面会したベンは、「新しい国連決議が議決されなければその戦争は違法となるであろう」との見解を出していた法務長官ゴールドスミス卿が、イラク侵攻のわずか3日前に、自らの立場を変え、「新しい国連決議がなくとも戦争は合法である」と宣言したことを確認することができたから、この面会の意義は大きい。しかも、エリザベスはそれを受けて辞職したそうだから、世の中の正義はまだまだ健在だ。そう確認したベン弁護士は勇氣100倍で法廷に臨むことに。

■□■さあ、世紀の大裁判が！アレしこの結末をどう考える？■□■

近時、中国共産党も香港特別行政区政府も、「香港には三権分立はない」と言い始めたが、日本では三権分立は大原則。それと共に、日本では「検察の独立」も大原則で、ロッキード事件における時の総理大臣・田中角栄の逮捕劇には日本国中が驚かされたものだ。しか

し、日本でも近時、この「検察の独立」原則にいろいろと問題が生じたし、韓国ではハチヤメチャになっている。そんな目で、本作におけるキャサリンの公訴提起に至る姿を見ると、イギリスの制度は奇々怪々で私にはサッパリわからない。

本作には、ベン弁護士と公訴局長のマクドナルド（ジェレミー・ノーサム）が“旧知の親友”として登場し、2人だけで会話を交わすシーンが2度も見られるが、もしこんな姿をマスコミが嗅ぎつければ、えらいことになるはずだ。各種組織や各種政治用語が難しい本作のパンフレットには、「KEYWORDS」解説があり、そこでは「公訴局（検察局・検察庁）」について、次のとおり解説されている。すなわち、

英イングランド・ウェールズ地方における刑事事件の訴追について、警察を含む捜査機関に対し、証拠上または公益上の観点から法的な助言を与える役割を持つ。映画では公訴局長官ケン・マクドナルドとガンの法廷弁護士ベン・エマーソンが友人同士として登場する。女王と英国政府に対して法的助言を行う法務長官が公訴局の監督者となる。法務長官は通常は起訴に影響を与えることはできないが、国の安全保障にかかわる事柄では訴追に長官の承認が必要となる。

しかし、これを読んで、なるほどそうだったのか、と納得できる日本人は少ないのでは・・・？それはともかく、本件でキャサリンが公務秘密法違反で起訴されたことは間違いない。2004年2月25日の今日は、その第1回公判の日だ。裁判の冒頭は被告人の罪状認否だが、そこでキャサリンは明確に罪状を否認。それを想定していた検察側は、いよいよこれから立証開始！そう思っていると、アレレ、検察官は「この裁判は税金の無駄遣いであるから、被告人に対する起訴を取り下げる」と述べたから、裁判官をはじめ法廷内はビックリ！こりゃ一体なぜ？それについては、あえてここでは何も触れないので、1人1人がしっかり考えてもらいたい。

2020（令和2）年9月14日記